

第四章 — 詩 誌 —

蒼 空

昭和十五年六月号

殺意

谷 玲之介

灼けた砂をまさぐれば

ゆくりなく 掌に觸れた

蒼白く發光する貝殻

耐えがたい潮騒の聲が

耳朶ちかく炎えた

黝々と星座がもえくづれた

(何故あなたは眸を反けたか)

ああ ほのかにくるめくものゝなかで。

昭和十五年七月号

けしのはな

谷 玲之介

けしのはな さいたよ

くちびる ^{あか}い

あの^こ姑娘の ように

さみしく さいたよ

けしのはな ゆれたよ

幌^ま馬^ち車^よの まどで

うるんだ ひとみ

切^{せつ}なく ゆれたよ

けしのはな ちったよ

明日^{あした}の さちを

ゆめみた ^{こひ}戀も

だまって ちったよ

焼跡のつばくら

谷 玲之介

みなみの くにから

つばくらが

はるばる きたのに ^や焼^{のほら}け野原

^{きよねん}去年の ^{うち}お家は

どこだと

^{かあ}母さん つばくら ^{さが}探してる

^{ほし}星さま ^み見えない

くらい^よ夜は

^{こども}子供の つばくら さみしかろ

^{かあ}可愛い ^{うち}お家が

できるまで

あたしの ^{ぼうし}帽子を ^か貸しましょか

僕の解剖

谷 玲 之 介

としは・未だはたちの小僧っ子じゃ
背は・日本男子の標準型、岡氏が羨ましいと言ひました
目方は・動物園の象よりや軽いさ
性質は・變な事を聞くねえ、べらんめえ、江戸っ子だい、
神田っ子だい、(アレ? なにかのセリフだゾ、これは――?)
戀人は・なし、申込に應ず、申込金不要
趣味は・パチンコ、ブランコ、ドロコ
欲しいものは・鼻の下を計るモノサシ
嗜好は・オコメ、ミヅ、クウキ、グリコ
夢は・見るけど忘れる、現実が夢であれ
悪いくせは・絶対秘密ですがネ、女性に弱いですワ
したいことは・結婚

昭和十五年八月号

泥人形 岡 登志夫氏に寄す

谷 玲之介

すなまみ
砂に塗れ

てんじつこ
天日に焦げ

ひもすがらくらゐみ
ひもすがら 暗き微笑

あせほほわか
蒼き頬に浮べつゝ

おろ
愚かしや 泥人形。

かもめしろふんをふみてと
鷗 白き糞を踏みて 翔びされば

なみだもてかたどりしそぞう
なみだもて 型どりし 塑像

——むなしきゆめお
——むなしき夢に 老いぬ。

ゆうべほのひかりまたた
ゆうべ 仄かなる微光 瞬くとき

ふと洩れぬ

すすりなき
歔歔 かすかに・・・

なげ
何故なれば

わがこひをほり
わが戀に終焉なきやと。

たそがれの章

花火もなく 銃聲もなく

いちにちは 扉をしめる

たそがれの匂^{にほ}ひを 撒^まきちらし

白銀のびりおどを

蒼穹^{そら}に――

鞭^{むち}となれ

飢餓^{きが}のむなしい いちにちよ

見えない空間を絶えて

わたしの瘦せたえすぷりをうて

あほむけば

無数の罪業にみちて

星たちの哄笑^{きら}が燦めく

注・「泥人形」は同じ八月号の岡登志夫の詩「秋と旅人」が、若き日の尊き一瞬を有意義に

幸多く過ごして、貴重な青春の時間を無駄に過ごすことなく充実したものとして欲しい

とのこころを詠っているのに対して、その返事を詩の形で綴っているものである。

この詩にはは副題「たそがれの章」が付けられている。えすぷり―機知、才気

★どうじん・ためしぎり・おんぱれいど★

怪物・谷玲之介

月 照美

あたり前の人間でないことだけは確かである。大きい聲を出して街をあたかもカマキリの如く怪異な容貌を少し上向きにして、下駄をひきづって飄々と歩く。彼の手は美しい。札束が漂白剤の代用をするらしい。(彼は押しも押されもない銀行員なのである。)「この手からあの「たばこ」が生れ「雪夜の囁唄」が生れるのだ。彼はまたその引っ込んでいる目を何時も天の一角に向けて「ボーイズ！ピーアンビシャス！」と口をとんがらかしてわめく。とにかく当たり前の人間でないことだけは確かなものである。

注・「蒼空」に投稿する仲間同士が相互に友人を批評して、切磋琢磨し合って相互に向上を計ろうとするコラムが★どうじん・ためしぎり・おんぱれいど★であった。月照美は太田と詩作を競う良きライバルであり、猪苗代湖の湖水浴には共に参加した。

